

2006年6月

世界が尊敬する日本人⑨



世界のプリマドンナ・三浦環

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

一九二〇年(大正 9)3月、三浦環はローマの国立コンスタンチ歌劇場で「蝶々夫人」に出演した時、作曲者のプッチーニから自宅山荘に招待された。

広い仕事場で、プッチーニはグランドピアノを指さながら、「マダム三浦、私はこのピアノで “蝶々夫人” を作曲しました。日本のレコードをもらい、“君が代” “宮さん、宮さん” “越後獅子” などのリズムをとり込んで作曲しました。私が長年夢に描いていた理想の蝶々さんこそあなたです」と環を絶賛した。

正から昭和初期にかけて、環はヨーロッパ、米国などに約20年間滞在し、世界的なプリマドンナとして活躍し、通算二千回にのぼる「蝶々夫人」の公演記録を作った。

イタリアのロジーナ・ストルキオ、アメリカが生んだ最初の偉大なオペラ歌手・ゼラルディン・ファラーと並ぶ、『世界の三大蝶々夫人歌手』との世界的な名声を獲得したが、日本では反感と冷たい視線を浴び続けた。

異国かぶれの女性歌手で、家庭をかえりみないと非難され、軍国主義と排外思想の高まる時代背景の中で、孤独な晩年をすごして亡くなった。

三浦環は明治17年、東京・芝に生まれた。東京音楽学校(現・東京芸大)に進み在学中に、日本人だけで上演された初の歌劇、グルック作曲の「オルフェオ」で主役を務めた。同校で教授となり若き日の山田耕作を教えた。

東京帝大医学部助手の三浦政太郎と結婚、大正3年31歳のとき、夫とともにベルリンへ留学した。

第一次世界大戦が始まり三浦夫妻はロンドンに逃れたが、ここでチャンスがめぐってくる。名指揮者ウッド卿のテストを受けて激賞され、一躍人気歌手になった。

大正 4 年 5 月、ロンドンでロシアの名テナー・ウラジミール・ロージンを相手に初めて「蝶々夫人」を演じた。「ある晴れた日に」を歌い、ピンカートンの乗った軍艦が長崎に入港し、合図の大砲が二発鳴る場面となった。ところが、大砲の音がつるべ打ちになり、観客が総立ちとなり我さきに逃げ出した。

初舞台の環はかまわず歌いつづけたが、気がつくとも客席もオーケストラボックスも空っぽ。ドイツのツェツペルン飛行船によるロンドンの初空襲の爆弾だったのだ。

「蝶々夫人」は大成功で、翌年は米国・シカゴ歌劇団に招かれ、一回の出演料が当時では破格の千ドル、1年百回の公演契約を結び北米・南米・ヨーロッパの劇場を巡演して絶賛を浴びた。ニューヨークのメトロポリタン歌劇場、ミラノのスカラ座など超一流の舞台にも立った。世界のテナー・エンリコ・カルーソーと共演したこともあった。

一九一八年十一月、第一次世界大戦の休戦条約が出来た祝賀の凱旋式が、ニューヨークのマディソン広場で行われたが、ウイルソン大統領が演説をして、三浦が歌い大喝采を浴びた。十五年間の米国滞在中、ウイルソン、ハーディング、クーリッジと三代の大統領の前で歌をうたい、度々ホワイトハウスにも招待されるなど、日本が生んだ人気最高のプリマドンナとして米国民から愛され尊敬されていた。

ところが、海外での成功者に日本の評価はきびしいのが常である。昭和十一年に八年ぶりに帰国したが、伴奏者の男性と一緒にだったため、夫(日本で研究者として活躍)がある身で不倫だとして強い非難を浴びた。夫は環に「歌をやめて家庭に帰れ」と親族会議を開いて迫り、後援会の面々も帝国ホテルに集まり、環の今後の海外行きの是非について論議する騒ぎとなった。

これは結局、「これからも環はプリマドンナとして国際文化交流に貢献するべきだ」と決まったものの、以後、環は海外公演をあきらめて、国内に活躍する場を求めた。しかし、時代はオペラも西洋音楽も歌えなくなる、英米の文化、思想を排撃する戦争、軍国色に一挙に傾いていった。戦時中は山中湖畔で静かに暮らした。

戦争終結の翌 21 年(一九四六)四月、環はガンに冒された体で NHK で「蝶々夫人」をラジオに録音したが、メトロポリタンに出演した時の衣装を着て歌ったのが最後になった。翌 5 月、63 歳で亡くなったが、東大医学部での解剖の結果、声帯は蝶々夫人と同じ 18 歳の若さのままだったという。

